

台灣情報誌

交流

2016年4月 *vol.901*

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

現代音楽と「相声」とレイ・リャンさん



交流

2016年4月
vol. 901

目次

CONTENTS

現代音楽と「相声」とレイ・リャンさん 1 (戸張東夫)
横浜での台湾インターンシップ生の受入 ～11年目を迎えた人材交流の歩み～ 6 (池谷嘉一)
【台湾内政及び対外関係をめぐる動向(2016年1月下旬～2016年3月下旬)】 新期立法院の開会、蔡英文政権に向けた動き14 (石原忠浩)
片倉佳史の台湾歴史紀行 第二回 高雄 (1)—台湾の産業と経済を支える港湾都市20 (片倉佳史)

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● 交流協会について ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗为国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

現代音楽と「相声」とレイ・リャンさん

ジャーナリスト 戸張東夫

クリスマスから新年にかけてのホリデーシーズンを、米国カリフォルニア州のサンディエゴに住む娘夫婦のところで孫たちと一ヶ月ほど過ごすことになってから何年になるだろう。サンディエゴはカリフォルニアの最南端。南はメキシコ国境に接し、西側は太平洋に開けている。気候温暖、後期高齢者の筆者には住み心地がすこぶるよい。

女房と空港に着くと、娘がいつも家族用のミニバンで迎えに来る。今回も同じ光景だ。空港から娘の家までは約三十分。途中車中の会話の中で娘がこんなことを教えてくれた。「作曲家のレイ・リャンさんが目下新曲に取り組んでいる。これには『相^{シアンション}声』を取り入れるとっている。」「そうか。リャンさんがまた新たな試みを始めたのだな。」と応じたものの、「相声」を取り入れるとは一体どういうことなのか想像できなかった。

「相声」は、わが国の落語や漫才によく似た中国の笑いの伝統話芸だ。それを現代音楽に取り込む。そんなことが出来るのか。「相声」は芸人の声で成り立っている。その音声をナレーションのように“組み込む”のだろうか。とにかく前代未聞の実験である。「相声」の魅力わが国に伝えようと、畑違いにもかかわらず、紹介する本を一冊出版してしまったほどの極め付きの「相声」ファンである筆者としては見過ごせない問題である。

さいわいリャンさんとは面識もあるので、お会いして詳しく聴いてみよう。そうだ。思い出した。確か二年前だ。パーティーの席でリャンさんに初めてお眼にかかった時、筆者が「相声」ファンだと自己紹介したのだ。それを覚えていて、「相声」の音楽化について知らせてくれた。そういうことなのだろう。とすると音楽になった「相声」をきくと聴

かせてもらえるだろう。面白いことになりそうだ。

2015年年末から翌年1月にかけてのサンディエゴの休日はこんなぐあいに幕を開けたのである。

- * レイ・リャンは Lei Liang。Lei (雷) は名前、Liang (梁) は姓。中国では梁雷だが、現地や音楽の世界では Lei Liang で通っている。
- * 「相声」を紹介した本というのは戸張東夫『中国のお笑い—伝統話芸“相声”の魅力』(大修館書店、2012年12月)のこと。

ピューリッツァー賞にノミネートされる

作曲家のリャンさんは、米カリフォルニア大学サンディエゴ校の教授で、音楽学部部長でもある。同校は現代音楽研究の最先端を行く機構として一目おかれている名門校だということは音楽の世界ではつとに知られている。わが国の桐朋学園大学音楽部とはかねて交流があり、昨年6月には同大学の作曲理論部会主催の公開講座に招かれ、“Toward an Austere Virtuosity (飾り気のない技巧に向かって)”と題する講演をしたり、その後愛知県立芸術大学の講座「多様式時代の方法論」にも参加している。学者タイプの作曲家といってよさそうだ。

2011年にローマ賞を授賞したほか、これに先立つ2009年にはアーロン・コーブランド・アワードを授賞しているし、グッゲンハイム・フェローシップにも選ばれた。昨年はピューリッツァー賞音楽部門にノミネートされ、入賞は逸したものの最終選考に残るという快挙を成し遂げた。気鋭の作曲家である。

1972年11月中国天津生まれ。中国の改革開放世代といってよからう。中国は1978年リャンさんが六歳のとき、鄧小平の主張する改革開放政策に転じ、毛沢東離れ、イデオロギー離れ、文化大

革命離れを進めた。中国の人々は1949年の中華人民共和国建国以来初めて政治やイデオロギーがらみの大衆運動から開放され、比較的自由に落ち着いた生活を営むことが許されたのである。リャンさんは、この時期に由緒ある中国藝術研究院音楽研究所で中国の古典や伝統文化を学ぶことが出来た。文化大革命当時は伝統文化は破壊すべき“敵”であった。その意味でリャンさんは運がよかったといってよいだろう。

幸運に恵まれたとはいえリャンさんにはリャンさんなりに強い不満を抱いていた。中国の人たちが経済的豊かさを求めることに熱中し、伝統文化や歴史的文物をちっとも大切にしようとしないのである。伝統文化など古いものは反革命だという文化大革命当時の考え方の影響もまだ残っていたのである。それだけが不満だからというわけではないが、1989年の天安門事件を機にアメリカに渡り、遠く離れた異国の地で祖国の伝統文化に思いを馳せ、その保護と再生に尽力している。

リャンさんとちがって運の悪かったものもある。

リャンさんは書生派、タン・トゥンは江湖派

たとえばリャンさんと同様アメリカを拠点に活動する中国人の作曲家タン・トゥン（譚盾）は1957年生まれの子孫世代である。中国は1966年から76年にかけて十年間全土を巻き込む政治運動“文化大革命”に突入した。タン自身も2年間強制的に農業に従事させられたが、政府も、共産党も、公安（警察）も、軍隊までもが崩壊し、無法地帯と化した中国で何とか生き抜いてきたのである。アメリカに渡り作曲家としての地位を確立した今日でもおそらく口に出せない苦痛や心の闇を抱えているに違いない。タンが環境に自分を合わせ、与えられたものは拒まず、貪欲にがむしゃらに活路を開いてきた猛烈な生き方は、歌劇でも、交響曲でも、映画音楽でも何でも拒まず手がけるタンの作曲家としての“今”にも影を落としてい

るといえないこともない。このような貪欲さはリャンさんには見られない。もちろんこの二人の資質そのものの違いもあったことはいうまでもあるまい。二人の違いを中国風にいうと、タンが江湖（渡世）派、これに対しリャンさんは書生派ということになるだろうか。

それにしてもリャンさんとタンの生まれた時期はわずか十五年違うだけだ。それなのにそれぞれ生まれ育った環境がこれほど異なる影響を二人に与えたのは現代中国が政治的、社会的安定を実現できなかったことを物語っている。

タンは数年前、確か2011年7月サンディエゴに来たことがある。それでタンを思い出したのである。自作の映画音楽をライブで演奏する野外コンサートが当地で開かれたので、それに出演するためである。巨大なスクリーンに映画を映しながら、それをバックにオーケストラが映画音楽を演奏し、タン自身がタクトを振った。この日演奏されたのは武侠映画三部作『グリーンデスティニー』、『HERO』、『女帝（エンペラー）』の音楽だった。7月には珍しく肌寒い日だった。サンディエゴの夏はあのときが初めてなので、よく覚えている。

* 武侠映画三部作の原題、監督、製作年は次のとおり。▼『グリーンデスティニー（臥虎藏龍）』李安、2000年▼『HERO（英雄）』張藝謀、2002年▼『女帝（エンペラー）（夜宴）』馮小剛、2006年。

どこか日本的な『Bamboo Lights』

リャンさんに話を戻そう。

リャンさんのCDとして出版されている組曲『Bamboo Lights（竹の光）』（2013年）を聴いたことがある。格調のたかい美しい旋律だ。どこか日本的で親近感すら感じさせる。

リャンさんとは2010年以来親交がある作曲家で桐朋学園大学院大学の作曲理論担当、石島正博教授は「『Bamboo lights』はレイ・リャンの死生

観を表現しています」と専門家の視点から読み解いている。音楽は底というか奥が深い。石島教授はまた「リャンさんは単なるエクゾティシズム(または中国趣味)によって有名になった人々とは全く無縁の存在です。寧ろ、孤高といっても良いかも知れません。」と語っている。

* 『Lei Liang Bamboo Lights』N.Y.・
Bridge Records Inc. 2014年出版。

* 桐朋学園大学院大学は日本で初めての芸術系独立大学院。富山市にある。

さて早くリャンさんにお会いして「相声」のことを詳しく聴きたいという筆者に娘がこんなことを言う。「リャンさんも作曲に参加したチェンバーオペラの発表会を学内のホールで開くのでいらっしゃいと招待されている。リャンさんも来るに違いない。」そこで娘と一緒に会場に赴いた。

オペラは始まっていた。ステージの上に女性が一人立ってバラードを歌っている。人身売買組織によってメキシコからカリフォルニアに連れてこられ、売春婦にされた女性の悲劇を訴えている。実際に起こった事件を題材にしているという。舞台後方で三人がギター、ピアノ、パーカッションを伴奏している。「相声」もこんな風に取り上げるのかもと想像した。終演後ようやくリャンさんと言葉を交わすことが出来た。

「リャンさん！音楽に『相声』を盛り込むってほんとうですか？」と筆者。すると「ほんとうです。」とリャンさん。筆者が続けて尋ねた。「どの芸人の語る『相声』を使うつもりですか？」

「侯宝林ホウバオリンです」とリャンさんが答えた。リャンさんは続けて「どんな具合になるか戸張さん(筆者)が帰国する前に必ずお聞かせします！」と約束してくれた。この日はこれで別れた。どうやら本気で「相声」を現代音楽の中に取り入れようと考えているらしい。それにしても中国には故人も含めれば「相声」芸人の数は多い。そのなかから侯宝林を選んだのはさすがである。眼の付けどころがいい。



リャンさん(右)と筆者の長女；パブルネック 涼(左)。大学の研究室で。

国宝級の相声芸人侯宝林

侯宝林を紹介する前に「相声」についていささか語っておこう。

「相声」はわが国の落語、漫談、漫才、コントなどを混ぜ合わせたような中国の伝統話芸である。演者の数によって三種類に分かれる。一人だと「単口タンコウ相声」、二人だと「対口トウコウ相声」、三人かそれ以上だと「群口チュンコウ相声」という。いずれも芸人が舞台に立ったままで語る。見た目でいうと「単口」は漫談や立って語るところが違うが落語、「対口」は漫才、「群口」はコントにそれぞれ似ている。

「相声」は清朝末期、咸豊帝在位の時期(1850～61)北京、天津など中国東北地方で発達し、広まった。今からざっと百六十年前のことである。そして1949年の中華人民共和国成立以前に作られたり、流布されていたものを「伝統相声」、1949年以後に作られたものはすべて「新作相声」とよばれている。

侯宝林(1917～1993年)は現代中国を代表する国民的相声芸人。国宝とよばれた。毛沢東が侯宝林のファンだったことはよく知られている。亡くなってからすでに四半世紀近く経つのに今でも録音テープやCDで多くの人たちを笑わせている。折り目正しい正確な北京語を話す、言葉にうるさい芸人だった。

「相声はなんといっても芸術であるから、芸術的な言葉を使う。相声は地元・北京の言葉で演じるが、普通の北京住民が日常使う北京の方言とは異なる。芸術的に手を加えてあるのだ。相声の北京語は簡潔で、洗練され、わかりやすくなければならぬ。」ある「相声」のまくらでこんなことをいっている。

得意な芸は物真似だった。物真似といっても動物の鳴き声や有名人の声色をまねるのではない。京劇や昆曲など伝統演劇の歌、セリフ、しぐさ、露天商の口上、物売りの売り声、それに方言などを真似るのである。なかでも伝統劇の物真似は他の追随を許さなかった。「相声」芸人になる前二年半師匠について京劇の修行をしたからである。侯のこの芸を楽しむには『戯劇与方言シイチュエイユイファンイエン（伝統劇と方言）』や『戯劇雑談シイチュエイツァタン（京劇漫談）』あたりを勧めたい。



大学の研究室で新曲について話すリャンさん。

侯宝林の聲が“規則正しい雑音”に変わる

侯宝林の演目の中からリャンさんが選んだのは『マイブットウ売布頭（布売り）』と『離婚前奏曲』の二つだった。前者は侯が得意の行商や露天商の売り声や口上を聞かせ、後者はまだ独身とウソをついて愛人と交際する中年幹部の失敗談。侯の愛人振りが終始笑いをさそう。もっとも「相声」の内容などはどうでもよいような気がしないでもない。という

のはリャンさんは「相声」を音楽の中に組み込むというのだ。とすると中国の「相声」を「相声」として、つまり笑いの伝統話芸として内容まで必要とするのかどうか？しかし「相声」を音として取り込むとはどういうことなのか？侯宝林の声や正確な北京語などを音、音声として使うということなのであろうか？そここのところがわからないのである。リャンさんが目下作曲しているのがコンピューターと電気工学の知識を駆使して作るハイテク音楽、電子音楽といわれるものだと、筆者はその時全く想像していなかったのである。

筆者が帰国する日の前日、音楽になった「相声」を聞かせてもらった。指定された大学の研究室に赴いた。リャンさん個人の研究室ではなくて、天井の高い大きなホールであった。テレビ局の録音スタジオのようなホールである。その一角にコンピューターや録音スタジオでよく見かける、音楽を調整するためのテーブル状の大きな装置がホールの一隅に、ホールを区切るような具合に置かれている。リャンさんはこの部屋で作曲をするらしいが、音楽を連想させるようなものは何もなく、殺風景なホールだった。向こうで別のグループがなににか組み立てている。筆者には娘と女房が同行していた。リャンさんの友人で詩人の葉維廉イェウエイリエンさんもやってきた。所定の場所にわれわれを座らせるとリャンさんが「始めます！」と声をかけた。

スピーカーがどこかにあるらしく、ザワザワという低い雑音、規則正しい雑音が聞こえる。無数の小さな黒い破片が大きく広げた紙の上を滑り落ちていく。眼を閉じて聞いていると、そんなイメージが浮かぶ。「相声」はいつ始まるのか首をかしげていたら、これが音になった「相声」であった。野太い人間のヨウという声は何の脈絡もなく、間隔をおいて二回聞こえた。ヨウとは中国語で「有」という文字の音と同じだった。それからまた規則正しい雑音に戻って終わった。「およそ三分です。」とリャンさんがいった。



同研究室で（左から）リャンさん、筆者、葉維廉さん。

進化する現代音楽が分からず違和感抱く？

筆者の予想と全く異なる音だった。『売布頭』も、『離婚前奏曲』も細かい音の要素に分解され、雑音としか聞こえなかった。コンピューターで作った音なのであろう。ショックで声も出なかった。侯の見事な北京語もこれでは形無しである。二つの「相声」は合わせて約三十分であるのに十分の一に短縮されてしまった。だが何もいえなかった。こんな感想はいまはいうべきではないという気持ちもないわけではなかったが、あまりの結果にやはり呆気にとられていたのである。

リャンさんも気がついた様子で口を開いた。「侯宝林を選んだのは、侯の音域が広いからです。たとえば郭德綱（いま中国で売れっ子の「相声」芸人）は音域が狭くて使えません。」

リャンさんが侯を選んだのは、北京語が正確だからとか、「相声」が面白いからだという筆者が想像していた理由ではなかったのだ。これもショックだった。筆者が気を取り直して尋ねた。「これでは『相声』かどうか判別が付きませんか？」「想像もつかないでしょう。」とリャンさん。「『相声』が破壊された？」と筆者が言うと、「そういえるかも？」と応え、さらにいま取り組んでいる作品について説明してくれた。

それによるとこの作品は三つの楽章で構成される電子音楽の組曲。タイトルは『聴景 (Hearing Landscapes)』。各楽章の標題は「高山」、「郷音」、「水雲」、合計 19 分 43 秒の作品だ。第二楽章に「相声」を使うのである。中国の近代山水画家 ホアンピンホン 黄賓虹 (1865～1955 年) の絵画の中の音を聴くというテーマ。この画家は 1953 年 88 歳前後に白内障のため両眼を失明した。だが失明してからの作品は中国伝統絵画の最高峰と言われる傑作だった。心中の山水を画面に映し出したのである。その時期の黄の作品のなかの音を作品にするのだという。

帰国後あのときのことを振り返ってみるに、言葉より細かい音になった「相声」を聞いた時の筆者の驚きとショックは多少体裁をつくらっていえば、「人が新しいテクノロジーに触れたときに起こる違和感」（『音楽未来形——デジタル時代の音楽文化のゆくえ』）に起因するものだったと説明できるような気がする。だが筆者としては自分の古い音楽概念や科学技術とともに発展進化する現代音楽に対する無知をさらけ出し、醜態を演じてしまったことを恥じ入るばかりである。

* 増田聡・谷口文和『音楽未来形——デジタル時代の音楽文化のゆくえ』（東京・洋泉社、2005 年 3 月、74 頁）。



ニューヨークで出版されたリャンさんの『Bamboo Lights』。

(2016 年 3 月 23 日)



横浜での台湾インターンシップ生の受入

～11年目を迎えた人材交流の歩み～

公益財団法人横浜企業経営支援財団

施設経営部長 池谷 嘉一

1 はじめに

横浜市の中企業支援センターである横浜企業経営支援財団 (IDEC) は、国際企業人材育成センター (ITI) 日本語班学生の横浜研修の受入に協力してきた。2006年からスタートした本事業も丸10年が経過し、2016年2月で11回目の受入を無事終了したところだ。この11年間に244名の学生が、のべ214社の横浜企業で研修を受けたことになる。この間の日台関係は、日本から台湾への投資拡大や台湾からの訪日者数の増加など緊密さを増した。受入事業もその意味合いを変化させながら、新たな10年に向けて歩み出している。

2 ITIの概要と学生

ITI (International Trade Institute) は台湾の既存の高等教育では得られなかった国際人材を育成するため1987年に設立された台湾貿易センター (TAITRA) 付属の専門組織である。日本語、英語、ドイツ語、フランス語などの外国語に加え、国際貿易や経営、国際人としてのマナーなどを総合的に教育している。台北・新竹・台中校に加え、高雄校の開校が準備中とのこと。日本語班は新竹校にあり、全寮制で2年間みっちり教育される。台湾や海外の大学・大学院を卒業後に入学し、企業での就業経験を持つ者もいる。新竹校の視察経験があるが、朝から晩まで日本語漬けになる環境が用意されている。寮で過ごす濃密な時間は学生同士の絆を深める。およそ1年半を過ぎた頃に、授業で学んだ日本語の実践と日本の企業文化や生活を体験するために日本研修が開始される。この

時期までには日本語能力試験で最も難しいとされるN1級の挑戦を全員が終えている。TOEICの平均は850点前後とのことなので、卒業時には3カ国語以上を操るようになる。卒業生は、華碩電脳 (ASUS) や微星科技 (MSI)、鴻海精密 (Foxconn) など台湾大手企業や日本の大手企業の台湾法人などに就職している。大手企業の経営者として活躍する人材を輩出している。

日本研修は約1ヶ月。1週間の全体研修 (東京) の後、学生は横浜組と福岡組とに分かれる。IDECはこの横浜研修に協力してきた。

台湾学生は、総じて真面目でおとなしいという印象だ。一方で、積極的で活発な面も併せ持っている。それを感じたのは、ITIの卒業式に参加した折りである。式典の厳かな雰囲気は日本と変わらないが、式の後半に披露された学生によるパフォーマンスに、その快活な一面を垣間見ることができた。学園生活を振り返ったミュージカル仕立てのパフォーマンスの印象は、今も鮮やかに



始業レセプション

残っている。

3 受入企業の推移と意識の変化

横浜での受入企業の移り変わりを振り返ってみたい。横浜の受入先の特徴は、その多様性だ。中小企業から大企業まで、業種も製造業からサービス業と幅広い。日産自動車、キリンビールなどの大企業やホテルニューグランド、横浜ベイサイドホテル東急などのホテル業、そごう横浜店などの百貨店。また地元の老舗企業である霧笛楼や近沢レース、有隣堂などの書店や協進印刷や大川印刷などの印刷業。さらに、フェリス女学院や関東学院大学、岩崎学園などの教育機関もある。横浜八景島シーパラダイスなどのアミューズメント施設や地域の公益財団等にこれまで受け入れていただいていたが、最近では中小企業の受入が主になっている。なかには、11回連続しての受入企業もある。電柱・交通広告を手がける旭広告社（中区）の中谷忠広社長は、「いまや我が社にとって、受入は恒例のもの。ITI学生は組織にとってよい刺激になっている。」とこれまでの受入を振り返る。

すっかり定着した本事業も、スタート時は受入先探しに苦労した。3週間という研修期間は、受入企業にとっては、単に会社事業を紹介するだけでは長く、特定の課題を実習させるには短いという微妙な期間のようだ。受入企業の負担、とくに受入担当者の負担は少なくない。どちらかといえば当初は地域貢献・国際貢献という意識で受け入れる企業が多かった。この潮目が変わり始めたのは、4～5年前からである。

4 インターンシップ生を戦力として採用

「学生たちがとても優秀。そればかりではなく、学生たちのネットワークもすごい。この素晴らしさをもっと横浜の企業経営者に伝え、活用しないのはもったいない。」。こう語るのは、大江電機(南

区)の大江光正社長だ。大江社長は、人的ネットワークを重視にする「人本主義経営」を企業理念とし、電設資材商社を経営してきた。これまでに横浜国立大学や慶應義塾大学の留学生との出会いをきっかけに、優秀な人材は国籍を問わず採用してきた。これらの人材を本社で教育した後に現地責任者として中国（上海・瀋陽）や韓国に派遣し、現地法人を設立してきた実績がある。こうした経験もあってか、横浜におけるITI学生の初めての採用企業となった。第一号となる沈思好さんの採用にあたり、大江社長は台湾を訪問し、沈さんの両親とも面会した。会社の経営方針などを直接説明し、子女が日本で就職する不安を取り除く努力をしたという。2013年に採用された沈さんは社内でも着実に実績を積み、その評価が継続しての受入とさらに翌年の学生採用につながっている。これを端緒に、受入先の学生採用は、半導体設計用ソフトウェア等の輸入・販売のイノテック（港北区）、インプラント等の製造・販売のヨシオカ（金沢区）、特殊耐火服・防護服等の製造・販売のエイブル山内（神奈川区）の計4社が8名を採用し、現在に至っている。

5 横浜の人材交流が継続している理由

毎年、学生を迎える時期になると、受入を継続している企業も初めて受け入れする企業も新しい出会いに期待をふくらませる。恒例の始業レセプションでは、たどたどしい日本語ながらも一生懸命に名刺交換を試みる学生たちの姿は新鮮だ。受入先が決定した段階でメールを通じたやりとりが開始されるが、ほとんどが初対面である。

なぜ人材交流というデリケートな事業が横浜で継続することができたのか？その理由を考えてみたい。

まずあげられるのは、本事業は宿泊費や交通費などすべての費用を台湾側が負担していること。受入企業に応分の費用負担を求めるスキームもあ

るが、こうした制度では中小企業の参画は難しく、ましてや11年間も継続することは困難だろう。

次に TAITRA 本部および東京事務所の強力な支援体制があげられる。始業レセプションと研修報告会のタイミングを捉え、毎回 TAITRA 本部から秘書長や ITI 主任らが来日し、受入企業と協力機関へのあいさつと御礼を欠かさない。また、学生と受入企業のマッチングに関して、必ずしも自分が希望する業種で研修ができるとは限らない。これに対して台湾側は「たとえ希望する業種や仕事でなくとも、与えられた受入先で学ばせてもらうことが研修」として、終始毅然と学生に対応している。新規の受入先には IDEC と TAITRA 東京事務所の担当者が訪問し、本事業に関する理解を得るようにしている。研修終了後には受入企業へのアンケート調査を行い、課題が寄せられた場合には迅速に対応している。新たに受入を希望する企業が着実に増えているのは心強い反応である。

横浜が学生の受入に有利な点として、台北駐日経済文化代処横浜分処の存在も欠かせない。毎年、研修のはじめと終わりに学生たちへの激励のメッセージをいただいている。さらに、忘れてならないのは、横浜台湾同郷会の存在だ。日本研修は毎年春節の前後になる。日本人に置き換えれば、年末年始に海外研修するようなもの。ITI 学生にとっても、里心がおきる季節だろう。この時期に開催される同郷会の新年会に学生全員を毎回招待いただいている。同郷の先輩たちと楽しく食卓を囲むことは、緊張した日々の続く学生たちにとって気持ちが和むひとときとなっている。

研修のまとめとして報告会を開催している。受入企業も参加のもと、各自が研修で学んだことや経験を自分の言葉で発表するのだが、学生たちがどのような研修を受けそれをどう感じたかを関係者が共有する場となっている。学生の日本語能力は始業時と比べて格段に進歩し、加えて立ち居振

る舞いも日本社会に馴染んだものとなっている。報告会は終了後の答礼宴と併せて研修に節目を与え、事業継続により効果をもたらしている。学生が受入先の担当者と別れを惜しむ光景も恒例のものとなっている。

以上見てきたように、本事業が横浜で根付いた理由は、学生たちを地域で迎え、その成果を見守る体制が整ってきたことにあるといえそうだ。

6 横浜の学生との交流へ

台湾の国際人材養成の考え方とその実践的な取り組みは、長期的な展望に基づくものだ。台湾のような制度を急に作り上げることはできないが、「せつかくの機会を少しでも横浜の人材育成につなげることはできないか」という意見が横浜側からでてきた。そこでまずは ITI 学生の横浜滞在中に地域大学生との交流の可能性が検討された。関東学院大学に打診したところ前向きな反応があったので、IDEC と横浜市経済局は TAITRA 東京事務所長とともに大学を訪問し、意見交換を行った。その結果、「やれることからやってみる」ことで合意し、「インターンシップ生の大学での受入」、「学生間の交流イベントの企画」などを検討することになった。年齢がそう変わらない台湾の学生たちが外国語である日本語を使い、市内企業でインターンシップを受ける姿勢は、日本の学生にとって良い刺激となっているようだ。受入担当の田中義浩課長からは「本学の学生にとっても有意義な事業」との感想をいただいている。ちなみに2013年の関東学院大学インターンシップ生である陳俊安さんは卒業後、TAITRA に就職した。ITI に着任し現在は後輩たちの引率者として来日、大学関係者との再会を果たしている。

IDEC は学生と受入企業とのよりよいマッチングを実現するために、学生との事前面談を行っているが、その際には受入企業にも声をかけている。学生が学ぶ環境を実際に見てもらうためである。



関東学院大学

2014年には10周年を記念して、受入企業10社（総勢18名）が訪台し、TAITRA本部ならびにITI新竹校等を訪問した。こうした折には、ITI卒業生との交流会を開催している。この卒業生とのネットワークも大切に育てていきたいものだ。

7 インバウンド事業との連携

「インターンシップ生を横浜の観光プロモーションに活用できないか」。ITI学生の受入れ経験もある横浜観光コンベンションビューローから相談があった。今や全国の地方自治体は海外からの誘客に躍起となっている。大陸からの来訪者の増加がメディアを通じて報じられているが、台湾からの来訪者数の安定した実績は貴重だ。ITI学生に質問しても日本訪問が初めてという人は少ない。3～4回というリピーターが多く、訪問先も首都圏ばかりではない。「地方の温泉に家族で旅行した」という日本通もいる。コンベンションビューローからの相談は、「台北で開催する横浜観光のプロモーションイベントに、ITI学生の力を借りたい。滞在を通じて経験した横浜の魅力をイベント内でプレゼンテーションして欲しい」というもの。2015年3月に開催された「横浜×台湾TOMODACHI PARTY」には、ITI学生8名が参加し、4名がプレゼンテーションを行った。横浜ラーメン博物館などでの飲食の体験談、赤レンガ倉庫、原鉄道模型博物館などのみなとみらいエリアや横浜中華街、八景島シーパラダイスなどの観



台湾での観光プロモーション

光スポットを多くの写真とともに紹介したプレゼンは、クイズ大会と並んで好評を博したとのこと。研修中にコンベンションビューローが企画した横浜の街歩き体験などが横浜の理解を深めたようだ。せっかくの横浜滞在を企業研修ばかりではなく、いろいろな横浜を経験することにより、「横浜ファンになってもらいたい」というのは受入側の共通した思いである。街歩き体験ツアーは内容を変えながら継続している。

8 横浜伝統の捺染技術 はっぴの試着体験

IDECには市内企業からさまざまな相談が日々寄せられている。創業以来、手仕事の捺染技術にこだわった、はっぴなどを製造する関東化染工業所（港南区）の佐藤政廣社長から、海外展開についての相談を受けた。はっぴは縁起のよい製品であり、英語ではHappy coatと訳されることもあるそうだ。国内では一定の購買層はあるものの、顧客が限定的であることは否めない。印半纏（しるしばんてん）は、背中部分に大胆な文様を配し、前面の衿部分には漢字などの名入れを染め抜く。これまでに広告代理店を通じて、航空会社のファーストクラス向けのはっぴを供給したり、大手企業からは海外向けプロモーション用のロゴマーク入りの受注があったりと海外との接点は少

なくなかった。横浜という土地柄、地元商社を通じて海外に輸出もしてきた。最近では訪日する海外観光客向けの記念品としてホテルや空港の売店などでも販売している。佐藤社長は、「安定的に海外に売り出す方法はないか」と思案し、自ら海外販路開拓のセミナーなどに参加していた。2015年11月より、IDECの「グローバル経営支援事業」を利用し、海外展開の仕組み作りなどについて支援を受けることになった。捺染技術はもともと横浜の地場産業。スカーフなどは海外向けの主力商品であった。しかし、近年では、Made in Yokohamaの製品は減少しているのが実状だ。この捺染技術の伝承を図るためにも、佐藤社長は新しい販路を開拓する必要性を感じていた。こうした中、IDECの紹介により、アニメ・フィギュアなどコレクティブアイテムの企画・製作・販売を手がけるマイルストーン（中区）と海外販売についての意見交換の機会を持った。マイルストーンからは、2016年2月を目標に「A-Janaika Japan（ええじゃないか、ジャパン）」という日本の匠の技を極めた高品質な商材を販売するサイトの立ち上げを準備中であることが紹介された。このサイトは、中国語（繁体字・簡体字）、フランス語、英語に対応している。「江戸」をキーワードにした商品をちょうど調査中であったため、このはっぴも取り扱うことが決まった。マイルストーンは3年前からITI学生を受入れており、今年も李柏勲さんを受け入れた。李さんも研修中に「A-Janaika Japan」の立ち上げにかかわった。3月には三溪園（中区本牧）にて、ITI学生の着付け体験を行ったが、併せてはっぴの試着体験を企画した。三溪園は、製糸・生糸貿易で財をなした横浜の実業家・原三溪（本名富太郎）が造りあげた広さ約175,000㎡（53,000坪）の日本庭園。佐藤社長より、はっぴの捺染工程の説明のほか、はっぴが完成するまでには、縫製などの小規模事業者によるものづくりネットワークに支えられていることが紹介され



はっぴの試着体験

た。好天と梅の見頃の時期とに恵まれ、学生のはっぴ姿も見映えがした。日本の伝統的なはっぴも着こなす方次第では、Kawaii(かわいい)に通じるようであった。全員にはっぴをプレゼントするというサプライズもあり、試着会は大いに盛り上がった。この模様は学生のSNSを通じて発信された。

このようにインターンシップ生の交流内容も幅広いものになっている。

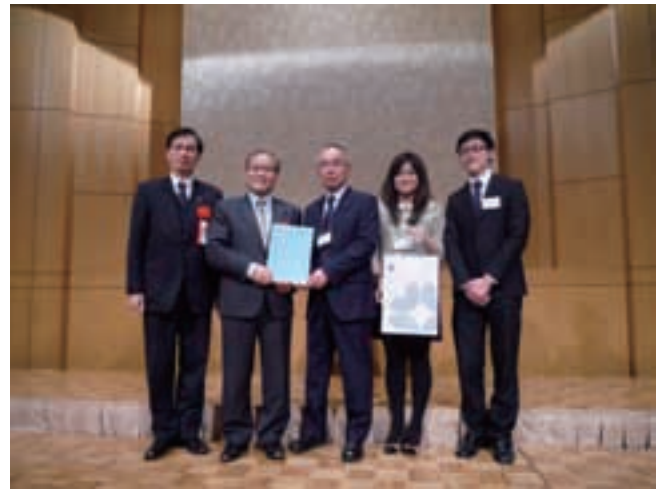
9 人材交流から経済交流へ

2013年7月、IDECとTAITRAは貿易・投資などに関する覚書を締結した。ITIとはインターンシップに関する覚書をすでに結んでいたが、企業間の経済交流を含めた総括的なものとしたため、TAITRA本部との締結に変更した。内容は両地域の展示会・見本市出展の支援、視察団の相互派遣、投資、貿易に関するセミナーの開催などである。横浜と台湾との経済交流は、1990年代に中日経済貿易発展基金会在（現在の台日経済貿易発展基金会在／台日商務交流協進会）編成した商談会の横浜開催への協力に遡る。故李上甲秘書長が引率される台湾企業との商談は大変活発であった。基金会的横浜商談会が中断して以来、台湾との企業交流は散発的な交流になっていたが、今回再開の機運が整ったことは喜ばしい限りだ。



TAITRA との調印式

覚書締結後、TAITRA と共催による台湾経済セミナーを横浜で開催している。TAITRA 東京事務所長による台湾経済の概況や日台ビジネスアライアンスの事例に加え、日本に拠点を持つ台湾企業の経営者による講演を行ってきた。いずれも TAITRA からでなければ、講演依頼が難しい方々ばかり。1 回目のゲストは、ASE ジャパン代表取締役の鍾智孝氏。ASE ジャパンは、1964 年設立の山形県にある日電高島製作所を前身とするが、2004 年に台湾の ASE グループのはじめての日本拠点として発足している。台湾企業のグローバルな視点から日本のものづくり工場を再生させた経験を話していただいた。2 回目の講師は、サニーヒルズジャパンのゼネラルマネージャーの堂園有的氏。こだわりのパイナップルケーキを製造・販売するサニーヒルズは、台北、シンガポール、上海に次いで南青山(東京)に店舗をオープンして話題になった。隈研吾氏による木材を組み合わせたユニークな建築物は、マスコミにも多く紹介されているが、ケーキの試食とお茶による台湾流おもてなしも話題となっている。堂園氏もセミナーでの講演はこの横浜がはじめてとのことであった。3 回目のゲストは、産業用 PC の分野で世界 21 カ国 92 都市に拠点を展開するアドバンテック副社長の呉明欽氏と日本法人社長のマイク



研修答礼宴

小池氏。グローバル戦略や日本市場に対する考え方などについてお話しいただいた。いずれの講師からも台湾企業から見たグローバルビジネスの考え方や戦略について何う貴重な機会であった。インターンシップ事業の初期と同様に、IDEC は台湾企業から学ぶことの有用性をまだ横浜企業に伝え切れてはいないが、継続して行うことにより、台湾企業を知りネットワークを築く場としていきたい。

10 日本で学ぶこと

横浜研修の終了後、毎回研修レポートが届けられる。学生それぞれのものの見方や感想が綴られている。報告は「日本企業のビジネスのやり方・価値観の習得」、「これまで勉強した日本語の実践」「日本文化・日本社会の体験」などから成る。示唆に富む内容なのでご紹介する(2015 年研修レポートより)。

●「日本企業のビジネスのやり方・価値観の習得」について

日本のビジネスの進め方の細かさについては多くの学生が感じているが、研修してみてその意味が理解できたとする肯定的な意見が多かった。

「日本の会社はよく効率がよくないと言われていたが、そうではなかった。ひとつの事を決定す

る前に何回も確認と検討するので、海外企業より時間がかかる。」「台湾は効率が重視されるので、プロジェクト全体を考えず一面しか見ない。スピードは早いミスが時々起こる。日本は時間がかかるが総合的に考えるのでミスが少ない。両方のいいところを取り込めば世界一のレベルになる。」「毎日の掃除を通じて日本の会社の仕事に対する態度は細かいところから作られていることがわかった。」「報連相（ほうれんそう）は大事なこと。仕事を順調に進めるだけでなく、トラブルや誤解も減らすことができる。」「研修する前の日本企業のイメージは完璧主義で厳しいというものであったが、研修した会社はリラックスしていると同時に、厳しい態度で細かいところまで仕事をしていた。」「日本の営業マンはお客様との信頼関係をより強くするために、週に1回挨拶に行ったり、悩みを聞いたりする。自分のノルマだけではなく、より良いソリューションを考え出す。』。

●「日本文化・日本社会の体験」について

残業については、「噂より少なかった」と感じた人と「日本人にとって残業はとても普通」と感じた人がいたが、これは受入先企業の社風や業種の違いが反映されたようだ。日本人は「物事に慎重」で「曖昧な態度を取る」といった指摘がよくされるが、学生の目にも同様に映ったようである。

「インタビューを通じて日本人の考え方をだんだん理解した。慎重な方が多いので、質問にははっきり答えなくて、ほとんど曖昧な返事をする。」「仕事や人との付き合いもグレーなエリアがよくある。だから私は自分がやったことが正しいかどうか時々迷ってしまった。」「日本人は会社で仕事をする時、他人に迷惑をかけないよう心がける。」「日本人は話す時、よく相槌を打つ。相槌を打つと相手の話をちゃんと聞いているような感じがする。」「日本はタテ社会ということを感じた。」「日本企業は毎朝朝礼があって、元気がでる

良い方法だと思う。』。

居酒屋体験は多くのインターンシップ生が経験した。業務後に同僚と酒を飲むのは、台湾から見ると特殊な習慣として映ったようである。

「日本のサラリーマンは仕事が終わっても、直接家に帰らず、必ず同僚と一緒に居酒屋へ行く。」「居酒屋へ行って、サラリーマンの雰囲気と日本ならではの飲酒文化を味わった。」「台湾と違うのはお酒と食べ物の順番。日本では先にお酒を飲む。台湾の場合は、先にごはんを食べてからお酒を飲む。』。

●「これまで勉強した日本語の実践」について

「ITIの学習が役に立ち日本でも通用した。」「研修中に耳が慣れどんどん上達した。」という自信を深めた派とまだまだ努力が必要と感じた派に分かれたようだ。能力不足を感じた人は、改めて日本語学習への意欲を持ったようである。感想には、「日本に行く前は日本で就職しなくなかったが、研修を通じてチャレンジしたくなった。」という前向きな意見のほか、ほとんどが「良い経験だった。」と研修を振り返っている。

共通意見として、日本人が挨拶をよくすることと時間を厳守することへの賞賛の声があった。

11 受入企業の反応

2016年の受入企業アンケートの結果を紹介したい。今回は27名の学生を25社が受入れた。「大変有意義」、「有意義」と回答した企業が96%。学生の「日本語・コミュニケーション能力」については、「日常会話だけでなく、業務の遂行にあたってはほとんど問題なかった」との回答が71%、「日常会話については問題なかったが、業務の遂行にあたっては不足があった」が21%、「日常会話についても困難」が4%という回答であった。語学力の個人差は存在するようである。「来年も受入を希望するか」という質問には、「希望する」が88%という回答を得ている（その他は検討

中とのこと)。

では、受入企業が「本事業に期待している」のは何だろうか? 「社内の活性化」(11社)、「国際人材採用」(10社)、「従業員教育」(9社)、「地域社会・国際社会への貢献」(9社)、「海外市場開拓」(4社)という順位(複数回答あり)。少数ではあるが、「新規事業開発」(3社)という回答もあった。「国際人材採用」という積極的な反応が出てきたのは、すでに紹介したとおり、3~4年前から。日本本社や台湾拠点での採用につながっている。加えて、「海外市場開拓」、「新規事業開発」という面でもこの事業が受け止められ始めたことは新しい傾向だ。中小企業といえども海外展開を意識せざるを得なくなってきた時代の影響と思われる。

「社内の活性化」や「従業員教育」に意義を感じ始めたことも、新しい反応といえそうだ。中小企業では新規採用も多くなか、社内の高齢化も進んでいる。学生には日本企業の風土や文化を体験してもらおう反面、硬直化してしまいがちな組織にITI学生が新鮮な風を吹き込む機会となっているようである。

学生の全員が必ずしも日本での就職を希望している訳ではない。したがって、「地域社会・国際社

会への貢献」という受入動機もありがたい反応だ。就職の斡旋だけを目的とした事業ではないので、このバランスを保つことも事業を継続していく上で重要だと感じる。

12 最後に

ITI インターンシップ生受入の経緯について紹介させていただいた。最後にこの事業の支援側の立場から、今後の受入について思うことを述べさせていただく。

2016年研修の学生アンケートからは、「もっと長い期間」「もっと営業などの実際の仕事に従事したい」という、より積極的な声があった。この意欲を受け止めた研修内容の組み立ても今後の課題といえそうだ。

横浜の受入企業は学生に学ぶ場を提供するとともに、これからは受入企業も学生から積極的に学ぶ姿勢を持つことが必要ではないか。採用実績が増えることも期待されるが、必ずしも採用につながらなくとも、日本の本社が異文化を取り込んでいく意味は大きいと思われる。併せて、台湾企業のビジネスに対するグローバルな視点や行動力・決断力の早さなどについて身近に感じていくことの意義は大きいと思われる。

台湾内政及び対外関係をめぐる動向（2016年1月下旬～2016年3月下旬）

新期立法院の開会、蔡英文政権に向けた動き

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

総統選挙敗北の結果、毛治国行政院長が辞任し張善政副院長が院長に昇格した。2月1日に第9期立法院が開会し、院長副院長選挙が行われ、民進党の蘇嘉全、蔡其昌ペアが院長、副院長に選出された。3月16日、蔡英文次期総統は、次期行政院長に林全元財政部長を指名した。3月26日に国民党主席選挙が行われ、洪秀柱前立法院副院長が当選した。

馬英九総統が3月中旬に中米の友好国であるグアテマラ、ベリーズを訪問した。

1. 立法院院長と副院長に民進党の蘇嘉全、蔡其昌が選出

1月16日の総統、立法委員選挙で民進党が第一党の座を獲得してから、次期立法院長の座をめぐる争いが激化し、毎日のように新聞紙上を賑わせた。民進党内で名乗りを挙げたのは、蘇嘉全元民進党秘書長、柯建銘立法委員、陳明文立法委員の3人であった。三委員の中で、唯一比例代表区から選出された蘇元秘書長は、蔡英文主席の意中の人物ではないかとの憶測があった。一方で、有力な対抗馬とされたのは、当選回数8回のベテラン委員である柯建銘氏であった。当初は、民進党立法委員による話し合いでの解決を目指し、1月28日には蔡主席の指示で陳菊高雄市長が仲介に乗り出すなど難航したが、最終的には蔡主席の意向に従い柯建銘、陳明文の両氏が辞退して、蘇氏を推すことが決定した。

2月1日に、第9期立法院が開会され、午前に

院長選挙が行われ、民進党の蘇嘉全委員が、民進党委員全員の68票のほか、時代力量所属の5票、無所属委員の1票を獲得し74票で圧勝した。国民党は頼士葆委員が同党所属全委員の35票、親民党は自党委員3名のほか、無党団結聯盟所属の1名を加えた4票を獲得した。同日午後には副院長選挙が行われ、民進党推薦の蔡其昌委員が国民党、親民党の推薦候補を大差で退けた。今回の投票では各党とも「造反」票が全くない結果となった。（表1）

院長、副院長選挙は予想通りの結果であったが、補佐役の同秘書長に台湾団結聯盟前秘書長の林志嘉氏が任命され驚きをもって迎えられた。

2. 新行政院長に張善政副院長が昇格

台湾の内閣は立法委員選挙の後に内閣が総辞職し、行政院長が交代することは、半ば慣例になっているが、国民党の下野が確定し、馬総統の任期が残すところ4か月になることもあり、次期院長

表1 立法院長、副院長選挙の結果

院長選挙			副院長選挙		
政党	候補	得票数	政党	候補	得票数
民進党	蘇嘉全	74	民進党	蔡其昌	74
国民党	頼士葆	35	国民党	曾銘宗	35
親民党	李鴻鈞	4	無党団結聯盟	高金素梅	4

表2 立法院院長、副院長、秘書長の経歴

名前	政党	最高学歴	主な経歴	出身
蘇嘉全	民進党	中山大修士	立法委員、屏東県長、内政部長、農業委員会主任委員、民進党秘書長	屏東県
蔡其昌	民進党	中興大修士	立方委員、民進党報道官	台中市
林志嘉	台聯	テネシー州立大修士	立法委員、台聯秘書長	新北市

人事が注目されていた。

選挙での惨敗から2日後に毛治国行政院長は内閣総辞職を表明し、総辞職の記念撮影後、自身は休暇を採り雲隠れし、馬總統の正式な裁定を待つ事態となった。その間、馬總統は自ら行政院長公邸へ赴き毛院長の慰留に努めたが毛氏に会見を拒絶される前代未聞の事態となった。馬總統はその後、毛院長の辞任は認めたが総辞職は認めず、当初は毛院長とともに辞任を表明していた張善政副院長が代理院長として政務を引き継いだ。

馬總統は、議会多数派(民進党)による組閣への希望を持っていたようであり、23日には總統府と民進党側で5月20日の新政権成立までの内閣人事について意見交換をしたが決裂し、2月1日の立法院の新会期の開始と継続性を重視し、張善政副院長を次期院長に指名した。張院長は留学先の米国で土木工学の博士号を取得後、台湾大学で教鞭を採った後、政府部門、エイサー、グーグルなど民間企業で要職を務め、2012年以降、政務委員、科学技術部長を歴任している。なお張院長は、台湾憲政史上初の所属政党の無い「無党籍」院長となった。副院長には、経済部長、国家発展委員会主任委員などを歴任した技術官僚出身の杜紫軍氏が就任した。

3. 蔡英文次期總統の動向

(1) 次期行政院長に林全元財政部長を指名

蔡英文政権の人事で注目されるのは、政権の要ともいえる行政院長である。蔡英文主席は人事は「4月にまとめて公表する」と言明していたが、当初の予定を「前倒しして」3月15日に記者会見を

開催し、陳水扁政権で財政部長を務め、現在は民進党のシンクタンク「新境界智库」執行長に就いている林全氏を次期行政院長に指名した。

蔡主席は林氏の指名理由につき、「すばらしい意思疎通能力を有し、私の治国理念を理解し、未来の政府の施政方針に対する理解度で彼に勝る者はいない」と施政理念における相互の理解があることを強調した。

林全次期院長も記者会見で、「台湾は危機と挑戦に直面しているが、危機は転機であり、挑戦は機会と期待でもある」、「今回の政権交代は、国会でも民進党が過半数議席を有しているので行政部門が政策を推進する際に意思疎通が比較的容易であり、政策を実現できる機会も増える」と意欲を示した。全体の組閣人事に関しては、蔡次期總統の意向を踏まえて林全次期院長が進め、4月中にも対外発表するとの説明がなされた。

(2) 蔡主席と宋楚瑜親民党主席が会談

3月9日、蔡次期總統は「請益之旅」と称して、總統就任前に各界関係者に教を請う活動を開始し、一人目の有力者として宋楚瑜親民党主席と会談した。同会談につき民進党はプレスリリースで、「宋主席は行政経験と政治履歴が豊富な先輩であるが、更に重要なのは選挙期間中に宋主席が何度も強調していた『国家のガバナンスは、与野党の対立を乗り越え、必ず社会最大の共通点を探し出し、台湾社会が現在直面している重大な挑戦を処理しなければならない』という姿勢である」と会談を高く評価した。

各紙の報道では、双方は年金、教育制度、司法制度など各イシューにつき意見交換したほかメ

ディア注目の宋主席に対する人事面での処遇に関しては、行政院長や海基会理事長のポストを用意か?とも噂されたが、民進党からは「今会談では人事についての話はなかった」と説明された。『聯合報』はコラムで民親両党の協力関係が進展すれば、最大野党の国民党は台湾政治の中で「周辺化」される可能性を指摘する論調も見られた。

(3) 蔡次期総統と馬総統の会談

蔡次期総統と馬総統による「双英会」は3月30日に台北賓館で開催された。過去の政権交代においても新旧総統が会談することは政権引継ぎの意味合いもあり、慣例化している。表3は2000年、2008年、2012年の政権引継ぎの内容をとりまとめたものである。

今回の「双英会」では、馬総統が三度も中華民国憲法を提起したのに対し、蔡次期総統が台湾の民主化を強調するなど、そのやりとりには硝煙の匂いも感じられたと報じられた。またクローズド会談では、年金、外交、教育、南シナ海、エネルギー問題などにつき意見交換がされたと報じられたが、蔡主席は年金問題を最初に取り上げ、馬総統が退任後も年金問題で影響力を発揮し、与野党が一緒に年金問題の解決のために協力するよう希望するとの発言がなされ、馬総統側からも好意的な回答をしたと報じられるなど、直面する課題に対して新旧総統が向き合う会談となった。

(4) 蔡英文主席が総統就任後も党主席兼務の意向を示す

3月2日に民進党は党中央執行委員会を開催し、同委員会の小組委員兼中央常務委員の管碧玲

立法委員が臨時動議を提出し、蔡主席が党主席の任期が切れる5月以後も、引き続き党主席を兼任するよう提案し、会議出席者からの要請を受け入れ、政見を確実に実行させるために現段階では主席を兼務する必要があるとして、引き続き党主席を兼任することを明白に表明した。

『聯合報』は党関係者の話として、主席兼務を決断したのには三つの政治的現実があるとして、「5月の政権引き継ぎ時期に先に党務を処理する必要性」、「別の新主席を選出しても必ずしも蔡総統の意向に従わない可能性」、「政務官が党務を兼務しないことは政務推進に不便」という三つの理由を論じた。

李登輝元総統以降の過去の陳、馬両総統は、「全国国民政府」、「全国国民の総統」、「党政分離の必要性」、「国政への専念」等を理由に一期目の総統就任時には党主席から離れたが、スムーズな施政の実現のために陳水扁は総統就任から2年後の2002年7月に、馬英九も執政1年後の2009年7月に党主席を兼務するようになった。その「末路」も似ているので記すと、陳氏は2004年12月の立法委員選挙、馬氏は2014年12月の統一地方選挙での選挙敗北で引責辞任に追い込まれている。

過去の陳馬両総統の政権発足時は、陳時代は民進党は議会で少数派、馬政権は立法院は国民党が多数派を占めたが王金平はじめ党内のライバルの存在があったことと比べると、蔡英文政権では立法院長、行政院長に意中の人物を配置できただけでなく、党内の権威も当時の陳馬両名よりも高く、スムーズな施政を行う条件は整っているように思

表3 過去の政権引き継ぎにかかる新旧総統会談の概要

会談者、日時	会談時間と型式	会談内容の主な情景
李登輝陳水扁 2000年3月30日	100分、クローズド会談後、記者会見で説明	兩岸、外交、国防改造、財政経済問題。陳氏は李総統を改革の父と呼ぶ
陳水扁馬英九 2008年4月1日	90分、テレビ中継60分、クローズド会談30分	安全、兩岸、外交、国防問題。92年コンセンサスの有無で激論
馬英九蔡英文 2012年3月30日	冒頭馬総統の挨拶、クローズド会談70分後記者会見	年金改革、エネルギー、南シナ海

資料元：『自由時報』、「政権交接 李扁会&扁馬会」、2016年3月30日、頁2を加筆修正。

えるが、万全の態勢で施政に臨むべく、従来の姿勢を修正してまで党主席兼務を受け入れたものと思われる。

(5) 蔡主席が地方視察、産業界を中心に意見交換

蔡次期総統は、2月23日以降台湾各地の産業視察を行った。公開されている日程だけでも23日の台北南港のバイオ医薬産業、物流産業を皮切りに台中の工作機械、精密機械、火力発電所及び伝統産業、新竹の半導体、嘉義の農業、台南のエコエネルギー、高雄の造船及びデジタルメディア産業の現場を視察し、関係者との座談会の場を設けた。

民進党関係者は「蔡次期総統は選挙期間中、エコエネルギー、国防、物流網、バイオ、精密機械などの分野の創意刷新を提起したほか、材料産業、農業も重視しており、今回の視察では、産業発展に必要な財政、税制優遇措置を含む関連法規の調整が今回の視察の重点である」と説明するところがあった。

4. 洪秀柱前立法院長が国民党初の女性主席に就任

(1) 党主席選挙までの展開

1月の総統副総統、立法委員選挙で惨敗を喫した国民党は、朱立倫主席が引責辞任をした。その直後から、党内では次期主席選挙をめぐる、駆け引きが始まった。総統選挙期間中、公認候補からの引きずり下された洪秀柱前立法院副院長は、次期主席選挙出馬の意欲を示していたほか、党内「主流派」からも当初は呉敦義副総統、郝龍斌副主席らの名前が取り沙汰されたほか、党内若手からは世代交代を求める声もあがった。

1月18日には中央常務委員10数名が呉副総統に主席選挙への出馬を直訴する動きも見られた。その後27日には、主流派は、黄敏恵代理主席に候補を1本化することになったが、これにつき当地メディアは「防洪作戦」(洪女史の当選を阻止する

作戦)と報じた。その後2月22日に、洪前副院長、黄代理主席、陳学聖立法委員、李新台北市議の4人が正式に出馬することになった。

3月12日と19日には4候補によるテレビ政見発表会が行われ、民進党や世論から長年批判されている党資産の処理方法や党の路線問題につき激しい攻防が繰り広げられた。

(2) 洪秀柱前副院長が同党初の女性主席に当選

3月26日に投開票が行われた主席選挙は、洪前副院長が過半数の得票率を獲得し、国民党初の女性主席に当選した。任期は2017年8月までとなっている。今回の選挙は得票数、得票率ともに歴代主席選挙の最低記録を更新することとなった。なお、有効資格選挙人数337351人に対する実際の投票数は140358人、投票率は41.61%であった。洪副院長圧勝の理由として、黄復興党部など伝統的な国民党の組織票を固めたことや「主流派」から実力者が立候補を回避したことなどが論じられている。

洪前副院長の当選後に蔡英文次期総統は、報道官を通じて洪主席に対し祝意を表明するとともに、台湾の与野党は手を携え、改革に取り組む協力を推進したいと表明した。また対岸の中国は、中国共産党総書記の身分で習近平氏から祝電が送られた。

当選した洪主席は、「廢墟の中から故郷を再建する」「黨員全員が努力し、斬新な未来に向けて率いていく」と強調する一方で、党内の批判に考慮し自分の主義主張が理解されていない部分は努力して意思疎通していくと理解を求めた。党内主流派が推薦したにも関わらず惨敗を喫した黄代理主席は、「選挙への準備期間が足りなかった。将来は引き続き国民党のボランティア黨員として党内にとどまり、党を支持し、再起させよう」と団結を求めた。

匿名の国民党立法委員は、洪次期主席には三つの挑戦があるとして、「党資産の処理」、「黨員の組織、人員の調整」、「青年の入党促進」を指摘した。

表4 国民党主席選挙の結果

	主な経歴	得票数	得票率
洪秀柱	前立法院副院長	78829	56.16%
黄敏恵	党副主席、前嘉義市長	46341	33.02%
李 新	台北市議会議員	7604	5.42%
陳学聖	立法委員	6784	4.83%

5. 馬總統の中米訪問、中国とガンビアの国交樹立

(1) 馬總統の中米友好国訪問

馬總統は3月13日から19日まで7日間の日程で友好国の中米グアテマラとベリーズを訪問し、往路は米ヒューストン、帰路はロスアンジェルスに立ち寄った。馬總統は帰国後の記者会見で「今回の外遊はジミー・モラレス・グアテマラ大統領、デーブ・バロー・ベリーズ首相、ホセ・アントニオ・アルバラード中米議会議員長の招きで国是訪問を行い、總統就任後12回目の外国訪問となった。訪問期間は短かったが訪問中の行程は充実しており、成果も豊富なものであった」と語った。続けて「今回の外遊ではグアテマラ、ベリーズ、セントルシア、セントクリストファーネイビス、セントビンセントグレナディーン5カ国の国家元首との会見がアレンジされ、長年に渡る友好協力関係の大切さを確認し、既存の堅い関係の基礎の上に引き続き、友好協力関係を強化していく」との希望が強調された。

(2) 中国とガンビアの国交樹立に対する台湾側の反応

3月17日、馬總統の外遊の際に中国はガンビアとの国交樹立を表明した。西アフリカに位置するガンビアは2013年11月に台湾と断交し、中国との国交樹立の意向を示していたが、当時の中国は兩岸関係の平和と安定を考慮して、ガンビアとの国交樹立を控えたとされる。3月18日付の『聯合報』は、蔡英文の總統就任が2ヶ月後に迫ったこの時期の中国とガンビアの外交関係の回復は、中国が行動を以って兩岸の外交休戦（外交休兵）

時代の終わりを宣告し、兩岸外交戦が再開することを予期させ、兩岸関係の発展に暗い影を落とすであろうと論じた。

外遊中の馬總統は滞在先のベリーズで「強烈な不満」を表明した後、外交部も遺憾の意を表明し、今後も中国が台湾の外交空間の拡大に圧力を加えるか否かを注視するとのコメントを表明した。

馬總統は19日の帰国直後の記者会見で、改めて中国に対し「強烈な不満」を表明し、兩岸関係の相互信頼関係の促進に不利であると指摘した。また不満の矛先は、民進党にも向けられた。民進党は、中国とガンビアの国交樹立後に馬政権が推進してきた「活路外交」の失敗を指摘、揶揄したが、馬總統はこのような自国政府への言動は「傷口に塩を塗るものである」と厳しく批判した。

台湾の対外活動の空間は限られたものである。2013年以降国交を有する国は22カ国であるが、今回のガンビアと中国の国交回復が台湾の対外関係及び対外活動に与えるダメージは限定的なものである。しかしながら、馬政権で外交部長を務めた欧鴻錬氏は今案件につき、「中国側の動きは蔡英文次期總統への警告のシグナルであり、民進党政権が今後の兩岸関係を楽観的に展望させないようにする意図が見える」と指摘し、「台湾が現在国交を有している国のほとんどが中国大陸との関係樹立を望んでおり、少なくともパナマ、パラグアイは中国に国交の樹立を申し出たが、中国に拒絶された経緯があるように、台湾側が国交国と兩岸関係の処理を誤れば、台湾との断交を選択する国が雪崩式に起こる可能性もある」との主張が報じられた。

6. 日台漁業委員会第5回会合の開催

(1) 漁業委員会第5回会合開催前の応酬

2013年4月に日台間で締結された「日台民間漁業取決め」では、同取り決めを円滑に実施するため、日台漁業委員会を設置した。その後2013年5月に第1回会合が開催されて以降、第2回会合

(2013年12月)、第3回会合(2014年1月)、第4回会合(2015年3月)が開催され、同会合ではその年の操業ルールを決めてきた。

同委員会の第5回会合が3月にも開催されることが予定されている中、2月18日付『聯合報』は一面トップで「釣魚台海域 風雲再起」(尖閣諸島海域で風雲再び)と報じた。この報道は、日台漁業委員会の開催を前に漁業取決めにおける日台漁民の操業範囲に不満を抱く沖縄県の漁民が同取決めの修正を企図しているとして、2月17日に宜蘭県の漁民関係者が抗議の記者会見を開催し、台湾当局に対し、漁民を支持し、漁業権益を守るよう訴える姿を写真入りで報じていた。

同報道は、「3月12日に浦崎唯昭沖縄県副知事が地元の漁業組合とともに東京で森山裕農林水産大臣に陳情を行った」と紹介したほか、台湾の日台関係筋が、「この沖縄漁民の動きは来月の作業ルール取決め交渉前の慣例的な陳情であり、日本政府が漁業取決めの内容を修正することはありえないだろう」との指摘も同時に報じた。

台湾漁民が最も憂慮するのは、「取り決めて認められた自分たちの操業可能海域が狭められるのではないか」といった問題だが、台湾ではその前日の3月16日に、李登輝元総統の日本語による著書「李登輝より日本へ贈る言葉」の中国語版が出版され、李氏が同著書の中で「尖閣諸島は台湾に属していない」と主張していたこともあり、漁業操業問題に「領土問題」が絡み台湾側の漁民が必要以上に声高に不満を提起することになった感があった。

かかる動向に対し、17日には漁民の記者会見に際し、林聰賢宜蘭県長が中央政府に対し主権と漁業権に関し、明白な立場を主張すべきであると呼びかけた。右に対して総統府報道官も、台湾は尖閣諸島の主権を有しているとの立場を述べたほか、蔡英文次期総統もメディアから「李元総統は尖閣諸島は日本のものであると主張しているが」

と問われ「この件について、民進党の立場は一貫して明白である。釣魚台は台湾に属する。」と改めて強調するところがあった。

藍系政治家やメディアには、「緑陣営は李登輝を代表人物として領土、歴史問題において日本へ強い主張を行わない」との不満が根強く存在し、「李登輝の側近であった蔡英文も領土、歴史問題で日本に対して弱腰、妥協的な態度を採るのではないかとうがった見方をする者がいるところ、このような流れになったようである。

日台間の懸案であった漁業問題は2013年に日台双方が実質上、歩み寄ったことで合意にこぎつけたが、台湾側の立場では「領土問題」は依然として解決しておらず、再び活動家による尖閣諸島での上陸事件や事故の発生で偏狭なナショナリズムに火が付き、摩擦、緊張の局面を迎える可能性があることを認識させられた。

(2) 日台漁業委員会第5回会合の開催

3月2日から4日にかけて開催された第5回会合は、取決めの適用海域における漁船の作業ルールにつき意見交換をし、日台双方の外務当局は現行の作業方式を維持し、引き続き適用水域において安心して作業ができる方法につき議論することに合意したとするプレスリリースを発出した。

今回の流れを振り返ると、日本における沖縄県漁業団体の中央政府への陳情行動に対して、取決めで定めた操業規則が修正され、権益に損害を与えられることを危惧した台湾漁民とそれに乗じたメディアが煽ったプロセスが見て取れる。同取決めは暫定的なものであり、台湾側の立場も「不満だが受け入れられる」ものであるのに対し、日本側漁民にとっては、操業する漁船数、規模で台湾側に劣っているところ、現行の取決めに不満がありそして、今問題は「やっかいな領土問題」も絡んでおり、日台間で依然として潜在的な懸案事項であることを再認識させられる事案となった。



高雄 (1) —台湾の産業と経済を支える港湾都市

片倉 佳史

高雄は台湾南部最大の都市であり、世界でも指折りの港湾都市でもある。市の中心部の人口は150万を誇り、台北に次ぐ台湾第二の都市である。そして、産業規模から判断すると、台湾でもっとも発達した工業都市にもなっている。今回は南国の大都会・高雄の素顔を紹介してみよう。

高雄 カオシオン（北京語）

高雄 こーひょん（ホーロー語・台湾語）

高雄 たかお（日本語）

台湾最大の産業都市

台湾南部には大きな平野が広がっている。ここは台湾最大の穀倉地帯であり、嘉南平原と呼ばれている。台湾中部の彰化県から雲林県、嘉義県、台南市、高雄市と続き、屏東県がこれに隣接する。名実ともに台湾最大の農業地帯となっており、高雄市はその中枢を担う大都市である。

高雄市は台北と共に台湾の二大都市圏を形成してきた。同時に台湾南部最大の工業地帯を擁し、長らく鉄鋼業や造船、製鉄などで知られてきた。1990年代からは台南市郊外に開かれたハイテク産業の工業団地とも連動し、新たな発展の形を見せている。

高雄市は1979年に政府直轄市（政令指定都市）となっている。清国統治時代以前より、台湾南部の中枢は長らく台南だったが、日本統治時代に港湾が整備されてからはこちらが南部を代表する都市として君臨してきた。

2010年12月には高雄市と高雄郊外を管轄していた高雄県が合併し、現在の人口は約277万に達している。近隣の台南市や屏東県を包含すると、人口は500万を超え、北部の台北都市圏と双壁になっている。

旧高雄市は人口密度が高いことでも知られてい

た。台湾全体の人口密度は1平方キロあたり649.19人となっているが、高雄市中心部は約1万人となっている（高雄市全体では943人）。中でも、中心部に位置する新興区は2万6265人となっている。これは台湾全土の中で新北市永和区、台北市大安区、新北市蘆州区に次いで第4位の高さである。

高雄市が管轄する地域は広く、面積は2947平方キロに達し、政府直轄都市の中で最大となっている。東辺には中央山脈が走り、台湾の最高峰・玉山（旧名・新高山、モリソン山）を含んでいるほか、現在、領有問題でアジアの火種とされている東沙（プラタス）諸島も高雄市の管轄となっており、旗津区に帰属している。

さらに、南沙（スプラトリー）諸島についても、台湾政府は領有権を主張しており、最大の島嶼で



名実ともに台湾南部最大の都市。港湾を擁するだけに空間的な広がり印象的だ。



日本統治時代の高雄市章。高雄の「タカ」の字が読み取れる。『日本都市大観』より

ある太平島（日本統治時代の呼称は長島）も台湾政府が実効統治している。

近代的な都市景観と昔ながらの風情

旧高雄市の中心部は港湾を取り囲むように発達している。標高 200 メートルほどの寿山（ことぶきやま）を除くと、一面の平野に家並みが広がっている。林立する高層ビルが整然と並んでおり、その間を広い道路が縦横に走る姿は壮観だ。

道路幅も広いため、交通渋滞はほとんど見られない。また、海に面しているためか、盆地に開けた台北市とは印象が大きく異なり、開放的な雰囲気包まれている。

また、工業都市としても知られている。日本統治時代に整備された港湾を中心に巨大なコンビナートが形成されており、火力発電所や製油所、製鉄所、造船所などが集まっている。

一方で、鼓山や旗津といった旧市街を散策すると、昔懐かしい風情を保つ家屋群が今も残っている。特に旗後半島の旗津を訪れると、港町ならではの風情が色濃く漂う。港湾を横切るようにフェリーが就航し、これは庶民の足として親しまれている。旗津には海鮮料理を扱うレストラン街があり、行楽客で賑わう。

なお、高雄は起伏のない平地に市街地が開けており、しかも都市計画によって町並みが整えられ



旗津の旧名は旗後。海鮮料理店が並び、独特な景観となっている。海水浴場などもあり、行楽スポットとして人気を集めている。



高雄港を横切るフェリーは「渡し舟」の風情が漂う。オートバイを積み込めるのが台湾らしい。

たため、建物は余裕をもって建てられていることが多い。そして、市内にはいわゆる町工場のようなものや個人経営の零細工場が多く見られる。

これらの大半は末端部品などを扱う工場で、従業員は少なく、規模も大きくはない。こういった工場で製造された部品は郊外に設けられた組み立て工場に送られ、製品となっていく。つまり、市内に小規模な工場があり、郊外で組み立てられた後、港に近い大工場に運び込まれて製品化される。そして、港から積み出されていくという流れが形成されているのである。

特に高雄国際空港周辺の小港区や前鎮区には大型の工場が集まっており、壮観な眺めだ。

交通機関が発達した南部最大の都市

北と南の二大都市圏を形成する台北とのアクセ

ス是非常に発達しており、かつては両都市間を結ぶ飛行機が10分間隔で就航していた。従来は飛行機と鉄道、長距離バスの三者が両都市間の輸送を担っていたが、鉄道は慢性的な混雑、バスは渋滞に悩まされてきた。

そこで高速鉄道の建設が計画され、2007年1月5日に高雄の北部に位置する左営と台北県（現・新北市）の板橋間に台湾高速鉄道（台湾高鐵）が開通。同年3月には台北駅乗り入れも実現した。これにより、航空路線は廃止に追い込まれ、高速鉄道は開業から3年後の2010年8月に総利用者が1億人を突破した。

都市内交通については従来は路線バスが担ってきたが、2008年3月にMRT（都市交通システム）が開業。現在はこれが市内交通の主軸となっている。南北を結ぶ紅線と東西を結ぶ橘線があり、路線長は42.7キロ。大部分が地下鉄となっているが、紅線の北部区間は高架となっている。

さらに、台湾では初の導入となったライトレール（高雄輕軌）も公共交通機関の仲間入りを果たした。これはスペインの技術が導入され、停車中に充電を行なうというシステムが採用されている。つまり、架線が存在しないという世界でも珍しい存在。今後の路線拡充が期待されている。



台湾高速鉄道は市街地の北側に位置する左営駅に発着している。在来線と接続しているがこちらの駅名は「新左営」となっており、別に左営駅も存在するのでわかりにくい。



MRT 美麗島駅。巨大なステンドグラスが迫ってくる。MRTは今後の延長計画もある。



新しい市民の足として期待されるライトレール。かつての貨物線跡を利用して整備されている。

台湾の言語文化を考える

現在、台湾の政府が公用語としているのは「國語」と呼ばれる言語である。これは「中華民國の國語」という意味で、いわゆる「北京語」と呼ばれている言語である。これは戦後、中華民國国民党政府によって持ち込まれ、台湾の人々が教え込まれてきた言葉である。

ただし、注意したいのは、この「國語」は発音、表現、語彙のいずれも、中国の北京語（普通話）とは相違が生じていることである。言い回しや表現はもちろんのこと、台湾特有の発音の存在や、経済や社会の成熟度合いの差異から生じる独自の進化、新語や造語、日本語や英語などからの借用語の多さなど、相違点は少なくない。

一方で、当然ながら、台湾土着の言語というべきものも存在している。台湾南部や東部など、多くの人々が母語かもしくはそれに近い感覚で使用しているのはホーロー語（Holo・河洛話）と呼ばれる言語で、使用人口の多さから「台湾語」と呼ばれることも多い。

ホーロー語は中国語の福建方言と分類されることが多い。福建省南部の方言言語は「閩南語」と呼ばれ、台湾でもこの言い方が長らく用いられてきた。華南地方は中国大陸の中でもとりわけ方言が強く、閩南語は廈門（アモイ）を中心とする地域言語である。

しかし、ホーロー語は漢人住民が台湾海峡を越え、台湾に移住した後に交わった原住民族文化との融合を経ており、半世紀にわたった日本の統治を受けた影響も大きい。つまり、台湾の地で独自の進化を遂げた言語と言うのが適切だという声がある。そういった意味で、閩南語とホーロー語は区別すべきだという意見も少なくない。

現在、台湾南部においてはこのホーロー語の使用率がとても多く、「國語」が主体の台北に慣れていると戸惑ってしまう。もちろん、こちらが外国人であれば、それに合わせて英語や日本語、そして國語を話してくれることは多いが、やはり台湾南部ではホーロー語の使用率は高く、その中枢として高雄や台南という都市が存在している。

台湾の行政機能は言うまでもなく台北にあるが、歴史的に台北は外省人比率が高く、しかも、政府のお膝元であったこともあって、いわゆる「中華民国」色の強い都市となっている。これに対し、高雄や台南は常に台湾の土着文化の中枢だった。特に台南の人々はそういった自負を持っていることが多い。

政府による言語政策と都市の地位

周知のように、今世紀に入った頃から台湾社会では「本土化（土着化）」が押し進められてきた。

これによって、人々の主体意識が高まり、多くの人々が自らのアイデンティティを模索するようになった。同時に、国民党の独裁時代に圧力をかけられ続けてきたホーロー語や客家語、原住民族の諸言語なども活力を取り戻してきた。外省人が一定の勢力を誇ってきた台北を除くと、土着言語を盛り上げようとする動きは台湾のどこへ行っても見られる。

時代の流れに翻弄されてきた台湾の土着言語だが、母語を学び直す若年層は確実に増えている。台湾の就職事情などを見ていると、地方都市との接触の多い営業職などに就く場合は多数派言語であるホーロー語が必須となっていたりする。就職活動についてもホーロー語ができるかどうかは重要なポイントになっている。

このようにホーロー語の重要性が高まると、おのずと高雄への関心も高まってくる。高雄はこれまで、台北のように行政の中枢になることはなく、あくまでも地方都市の扱いを受けてきた。政府主導の文化政策においても、常に台北の下に置かれていた印象が拭えない。

これは台湾語が國語（北京語）の下に置かれてきたという構図に似ている。台北が北京語文化、高雄が台湾語文化の中心という構図は以前からあったが、そのことが注目されることはなかった。しかし、1990年代以降、台湾という土地への帰属意識が高まるに連れ、高雄という都市の地位は確実に上がってきたのである。

台湾土着の言語として人々に愛されるホーロー語。高雄はその文化の発信基地としての機能を持っている。そういった意味では、都市としてだけでなく、台湾の人々の意識上でも台北と肩を並べる存在になっている。台北だけを見ていると、なかなか見えてこない面があるのは明確な事実である。

新政権時代の幕開けとともに、今後の台湾情勢を見ていく上で、今まで以上に高雄の存在が重要

な位置を占めていくのは間違いないと思われる。

愛郷心の強い高雄人

高雄人の気質についても触れておきたい。

高雄に限らず、外国人旅行者が台湾南部を旅すると、人々のとても気さくでフレンドリーな一面に触れ、好印象を持つことが多い。台北でも十分に人々は親切だという印象を抱くが、台湾の人々に北と南の気質の違いを尋ねてみると、明確に印象が分かれていることが多い。

多くの場合、指摘されるのは個人主義の傾向が強い台北人と、郷土愛が強い高雄人という分け方である。都市化の進んだ台北において個人主義が発達するのはわかるが、高雄をはじめとする南部の人々に郷土愛が強いこと理由は、北部の人々よりも古くから台湾に暮らしていることと、農民が多く、土地に密着した生活を送ってきたという社会的背景が指摘される。

また、温暖な気候に恵まれ、日本統治時代に行なわれた灌漑施設の整備や農法の改良によって農業の生産性が高く、物資の供給が安定していること、そして、全体的な暮らしぶりが豊かで、生活に余裕があることも挙げられる。暮らしやすさにおいては、台北人であっても、台北よりも高雄や台中などに軍配があがると判断する人が多い。

そして、台湾南部の人々と知り合うと、「お国自慢」を耳にする機会も多い。これもまた、郷土愛に直結していると言える。異国からやってきた旅行者に対し、自らの故郷の魅力を伝えたいと願うあまり、多弁となり、おのずと親切になる。これは外国人旅行者に限ったものではなく、同じ台湾内でも、例えば北部や東部からやってきた人に対し、南部の人々は決まって温かく迎えるという。その理由を「愛郷心」に結び付けると、説明が成り立ちそうだ。

注目したいのは、台湾の地方在住者が台北と高雄のどちらに好印象をいただいているかである。具



高雄の町並みは、四方を山稜で囲まれた台北とは異なって密集度が低く、空間的な広がりがあるのが特徴となっている。



近代的なビル群と活気溢れる町並み。そして、南国情緒が色濃く漂う緑地のコントラストが印象的だ。

体的な統計資料はないものの、筆者がこれまで尋ねてきたかぎりでは、地方在住者が親近感を感じているのは、台北よりも高雄である。特に本省人、中でもホーロー人はこの傾向が強い。

その理由は先にも述べたように、人々が日常的に使用している言語にあるのかもしれない。高雄は多くの台湾人にとって、単なる地方都市ではない。ホーロー語文化の発信基地である高雄は台湾人の郷土愛の象徴にもなりつつある。

台湾の生命線と謳われた港

高雄市は台湾南部の産業都市として不動の地位を占めているが、この発達はすべて港によって築かれたものであると言ってもいいだろう。高雄の歴史をひもとくと、港は常に重要な位置を占めている。

地図を開いてみると、台湾の西部沿岸には単調な砂浜が延々と続いている。これらは決まって遠

浅であり、河川による土砂の堆積が著しい。かつて清国統治時代に、中国大陸との交易で栄えた淡水や鹿港、安平（あんぴん）などは、すべてこの土砂の堆積で港湾機能を失っている。現在も日本統治時代に築港が始まり、戦後になって完成した台中港を除くと、台湾西部にほとんど港湾らしいものが存在していない。そんな中、隆起珊瑚礁と潟によって、入り江となっていた高雄は、西部唯一の天然の良港だった。

しかし、この港にも大きな問題があった。地形的には確かに良港に見えるが、港内には数多の岩礁が横たわっており、大型船舶の航行には向かなかった。また、細長くのびた砂州のために潮の干満が生じ、潮の流れが思いのほか速い。日本統治時代以前から船の入港は盛んだったと伝えられるが、干満の障害が大きく、時間帯による制限を受けていた。

築港工事が着手されたのは、1908（明治41）年のことだった。しかし、1900（明治33）年に台南との間に鉄道が開通すると、早くも港内の泥を採掘する作業が始められていた。その後、資金難や物資難もあって工事は難航したが、1911（大正元）年には第一期の工事が終わる。時は前後するが、1910（明治43）年には、すでに高雄の貿易額は基隆（きいるん）を上回っており、当初計画された港湾規模はさらに拡大されている。

この第一期工事と併行して、都市計画も実施されている。高雄（当時は打狗）川の西側一帯に港湾内で採掘された土砂を用いた埋め立て地が造営され、ここには約4万2千人の居住が可能とされた。この高雄川は現在は愛河と呼ばれている。両岸は緑地公園となっており、憩いの場として整備されている。

第二期の築港工事は、新埠頭の造営と設備の近代化が実施された。この時、新埠頭は5000トン級の船が着岸できるよう、水深も考慮された。第二期工事は1937（昭和12）年に完成となり、同年、

第三期築港工事が着手されているが、これは戦争によって、補強工事と保全に力が注がれたため、日本統治時代に完成を見ることはなかった。

こういった一連の築港工事によって、高雄は工業都市として大きく発展した。兼ねてより、セメント工業を始め、化学肥料や酒精の製造などは盛んだったが、戦争の突入とともに鉄鋼業をはじめとする軍需産業が飛躍的に発展するようになる。そして、日月潭水力発電所の完成によって、電力の安定供給が実現すると、高雄は台湾を代表する産業都市として、さらに重要な地位を担うことになっていった。

戦争中はこれらの産業施設が空爆の対象となり、大きな被害を受けることとなった。しかし、終戦後、台湾が中華民国国民党政権の統治下に入った後、朝鮮戦争によってアメリカの援助が入るようになり、高雄は息を吹き返す。

修復工事は1952年には終わっている。これによって、一度は停止した高雄の産業も再び発展を始める。1958年からは12年計画で港湾拡張工事や第二港湾施設、火力発電所の造営などが実施され、積み出し処理能力が格段に上がった。

1967年からは8年がかりで、旗後半島に第二港口を切り開く工事が進められた。これによって、巨大な砂嘴であった旗後半島は孤島のような状態になったが、その後、台湾で最初の海底トンネルが1984年に完成し、高雄の市街地との連結が実現している。

1982年には世界五大コンテナ積出港にも挙げられ、その名は広く知れわたることとなった。1990年代後半からは横浜市や神戸市にならい、港湾を中心とした広範なエリアを再整備し、散策が楽しめる憩いの場とする試みを実施された。倉庫街を芸術展示空間にしたり、旧貨物駅を鉄道博物館として整備するなど、今や、港湾は高雄最大の行楽スポットになっている。



高雄港はアジアを代表する港湾の一つ。現在、岸壁や倉庫群を散策スポットにする整備が進められている。



高雄市は現在、台湾南部の産業都市として不動の位置を占めている。その歴史は常に港と共にあった。

帝冠様式の壮麗な駅舎建築

高雄のシンボルとしては高雄旧駅舎を挙げておきたい。ここは開設以来、いつも多くの人々で賑わっていた町の玄関である。現在、駅舎としての機能はすでに終えており、現駅舎にその座を明け渡している。一時期は高雄願景館という高雄市の広報センターとして使用されていた。

この辺りはかつて三塊厝（さんかいせき）と呼ばれていた土地で、日本時代の初期は全くの荒地地であったという。「三塊厝」の「厝」とは家屋を意味する言葉である。つまり、ここにはかつて、わずか三戸の家屋があるに過ぎなかったという史実をこの地名は示している。

この一帯が本格的な開発を受けたのは昭和時代に入ってからで、新駅が設けられたのは1941（昭

和16）年だった。それまでの高雄駅は高雄港駅と改められ、新駅が高雄の玄関となった。高雄港駅は貨物駅となり、現在は打狗鉄道故事館の名で整備されている。

独特な風貌で知られたこの駅舎は、1941（昭和16）年6月22日に竣工した。建物は帝冠様式と呼ばれるもので、鉄筋コンクリート造りの箱形の建物に、日本風の瓦屋根を載せている。帝冠様式は戦時体制下の日本に生まれた独特な様式で、台湾にもいくつかが残っている。旧大日本帝国だけに見られ、しかも時代が昭和10年前後から終戦までだけのものなので、希少価値が高い。小ぶりながらも壮麗な造りに圧倒されてしまいそうだ。

この駅舎は高速鉄道と新交通システムの開業準備のため、2002年3月に現役を退いた。そして、同年8月16日、駅舎は14日間をかけ、建物を分解することなく、82メートルほど平行移動された。大がかりな移動作業は人々の関心を集め、のべ10万もの見物客がやってきたといわれる。

老校舎が残る旧制中学

日本統治時代に設けられた旧制高雄中学は現在、高雄市立高雄高級中学という名になっている。終戦までは高雄州立高雄中学校を名乗っていた教育機関で、高雄駅から遠くはない場所にある。

この学校が創設されたのは1922（大正11）年4月のことである。新興都市である高雄にとって、



名実ともに高雄の玄関口として機能していた高雄旧駅舎。珍しい帝冠様式の建物は今も強烈な存在感を誇っている。

最初の旧制中学だった。ちなみに、翌々年には同じく高雄州立の高雄女学校が開校している。

日本統治時代の教育制度は内地人（本土出身者とその子孫）子弟と本島人（台湾住民）子弟の間に明確な区別が設けられていた。初等教育機関については尋常小学校、公学校に分けられ、中等教育機関は当時内地人と呼ばれた日本人のために設けられたもので、公学校を卒業した台湾人子弟が入学する機会は極めて限られていた。

校門に立ち、校舎を眺めると、赤煉瓦造りの美しい建物が迫る。現在、日本統治時代に建てられた建築物はわずかにこの校舎だけだ。講堂は総合大樓と名付けられた大型建築に変わり、柔剣道場は戦後もしばらく残っていたが、現在は取り壊され、テニスコートになっている。

筆者はかつて、学校の周囲は一面の水田と荒野が広がっていたという古老の話を聞いたことがある。しかし、現在はその言葉を信じることができなくなってしまったほど、住宅や商店が空間を埋め尽くしている。

現在、この学校の生徒数は3500人を数え、教職員だけでも200人いるという。私がこの学校を訪れた際にも、多くの学生たちが構内を走り回っていた。台湾の未来を背負っていく若者たちが巣立っていく老校舎。全く古さを感じさせないのは、常にこの校舎が「若さ」とともに存在しているからだろうか。

次回は日本統治時代の高雄と歴史建築を紹介したいと思う。



旧制高雄中学は1927（昭和2）年に第一回目の卒業生を輩出している。当時の修業年限は5年であった。



1944（昭和19）年になると左營にもう1つの中学校が開校され、それに伴ってこちらは高雄第一中学校と改称している。



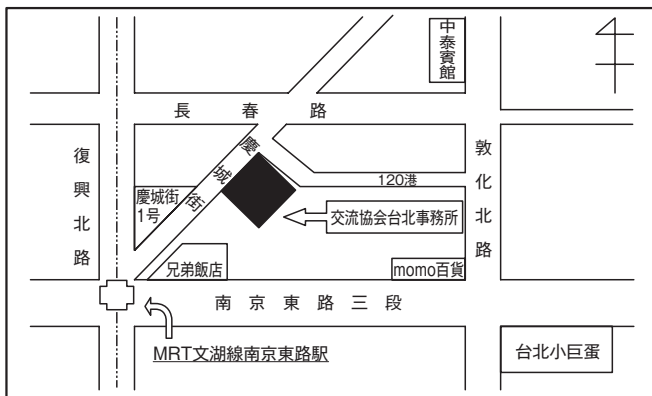
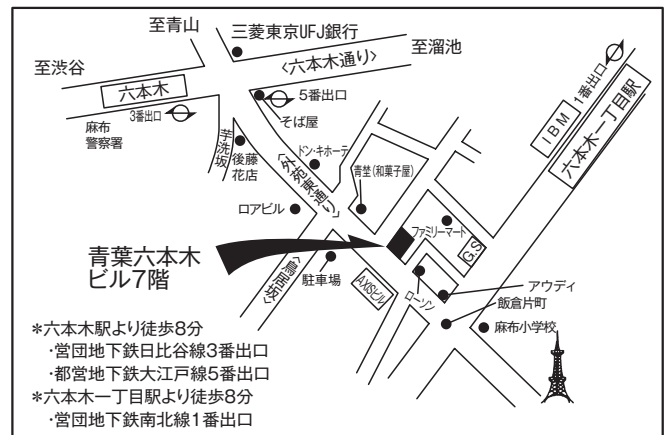
日本統治時代に作成された高雄港一帯の地図。旗後地区を除くとほぼ全域が日本人の手によって計画的に整備されたというのも、高雄の特色とされる。

片倉佳史 (かたくら よしふみ) 1969 年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ 35 冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『旅の指さし会話帳・台湾』(情報センター出版局)、台湾生活情報誌『悠遊台湾』など。2012 年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』(宝島社)を手がける。最新刊は『音鉄-耳で楽しむ鉄道の世界』(ワニブックス)。また、『観光コースでない台湾南部編』を近刊予定。

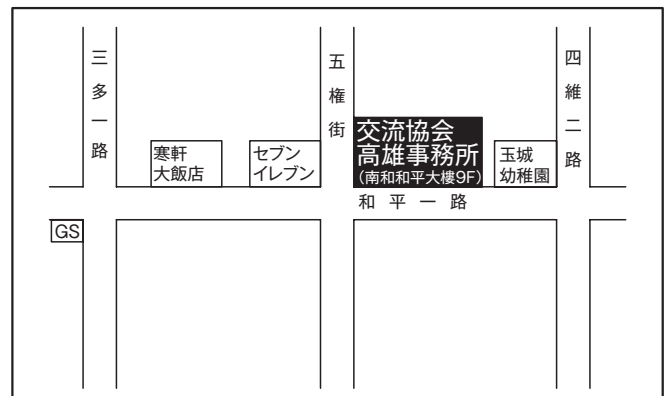
ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>

平成28年4月25日 発行
 編集・発行人 舟町仁志
 発行所 郵便番号 106-0032
 東京都港区六本木3丁目16番33号
 青葉六本木ビル7階
 公益財団法人 交流協会 総務部
 電話 (03) 5573-2600
 F A X (03) 5573-2601
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

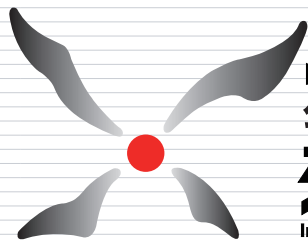
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社
 印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓
 Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei
 電話 (886) 2-2713-8000
 F A X (886) 2-2713-8787
 URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号
 南和和平大樓9F
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
 電話 (886) 7-771-4008 (代)
 F A X (886) 2-771-2734
 URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



日本と台湾との架け橋
公益財団法人
交流協会
Interchange Association, Japan (IAJ)

